



◆生育状況について

本年も、品種間の生育差がなく、摘粒・ジベ処理等各種作業が間に合わず、袋掛け作業が遅れている方が目立つ。袋掛けを早く行う事は、病虫害防除対策にも重要。

◆当面する重点作業について

1. 病虫害防除・雹害等気象災害対策のため、袋かけを早期に終了させる。(情報No.7 参照)
2. 梅雨明け後は、高温による急激な土壌水分の変化で樹が弱るため、計画的なかん水を実施し、水分ストレス(葉焼け・裂果・着色不良・粒伸び不足・成熟遅延)の予防をする。
3. 副梢の発生が多く棚面が暗い園は、適正な新梢管理を徹底する。
4. 裂果対策を徹底する。発生した場合は一部袋内を確認し、ひどいものは速やかに摘粒し被害軽減(カビ)をする。

◆品質向上・苦土欠乏対策について

品質向上と欠乏症として、必要に応じて、下記葉面散布肥料を散布する。

1. 葉面散布：薬剤散布に加用又は単用散布する。

【品質向上対策】※下記より、いずれかを選択。

資材名	使用倍率	水 1000 当り 調合量
モーニングシャイン	1,000～500倍	100～200ml
オルガミン	1,000～2,000倍	100～50ml
ケルパック66	3,000倍	33g
友果	500～1,000倍	200～100g

+

【苦土欠乏対策】※下記より、いずれかを選択。

資材名	使用倍率	水 1000 当り 調合量
グリーントップ70	500倍	200g
リーフマグ	1,000倍	100g

◆第11回薬剤散布について

1. 散布時期：前回散布14日以内

実際散布月日	月	日
--------	---	---
2. 使用薬剤（混用順記載）※調合量1000当り・10a当り散布量：3500以上

農薬名	使用倍率	調合量	収穫前	病虫害
I C ボ ル ド ー 6 6 D	50倍	2kg	—	べと病・さび病・黒とう病
固着性展着剤K. Kステッカー	3,000倍	33ml	—	—

◆第 1 2 回薬剤散布について

1. 散布時期：前回散布 1 4 日以内

実際散布月日	月	日
--------	---	---
2. 使用薬剤（混用順記載）※調合量 1 0 0 ℓ 当り・1 0 a 当り散布量：3 5 0 ℓ 以上

農薬名	使用倍率	調合量	収穫前	病害虫
I C ボ ル ドー 6 6 D	5 0 倍	2 kg	—	べと病・さび病・黒とう病
固着性展着剤K・Kステッカー	3, 0 0 0 倍	3 3 ml	—	—

3. 散布上の留意事項
 - 1) ブドウトラカミキリの発生が心配される場合は、アルバリン顆粒水溶剤 2, 000 倍（水 100ℓ 当り 50ml）を加用散布する。

◆第 1 1 ・ 1 2 回薬剤散布共通留意事項について

3. 散布上の留意事項
 - 1) 散布間隔を空けずに、定期的に棚上まで十分散布する。
 - 2) I C ボルドー 6 6 D に代えて 4－4 式ボルドー液（生石灰 400 g、⑩硫酸銅 400 g）を使用しても良い。
 - 3) 固着性展着剤K・Kステッカーに代えて固着性展着剤アビオンE 1, 500 倍（水 100ℓ 当り 66ml）を使用しても良い。使用する場合は最初に調合する。
 - 4) ボルドー液は他の作物（果樹・野菜・花等）にかからないよう注意する。

◆クビアカスカシバ対策について

1. 7 月より虫糞排出が目立ち始めるので、発見したら幼虫を捕殺する。スプレー式殺虫剤ロビンフット（収穫前日まで・年間 5 回まで）も有効。
2. 再発が多いので、過去発生した園や樹は特に見回る。

◆縮果症について

1. 症状：粒の果皮直下が褐色～茶色に変色し凹む。
2. 要因：梅雨から梅雨明け後の急激な温度変化と土壤水分の変化により、吸水と蒸散のバランスが崩れた結果や、副梢整理を極端に行う事で発生する。
3. 対策：排水とかん水を適切に実施すると共に、副梢切除をこまめに行い、急激な養分転流や競合を抑える。

※縮果症発生する部位は、毎年（樹や主枝単位）出る可能性があるため、翌年の管理に注意するため、目印をつけておく。

◆日焼け防止用傘紙の除去について

日焼け防止に使用した新聞紙は着色期（色が出揃った頃）に入ると不要になるので、着色している房から除去する。

1. 除去する時間帯は、午後 2 時～4 時頃で果実温の高い時に実施する。
2. 遅れないように外していく。ただし、乳白のワンタッチポリ傘は外す必要はない。
3. シャインマスカットは収穫まで外さなくても良い。
4. 日射が強い場所は、日焼けが心配されるため、高温時期を過ぎてから行う。
5. 鳥獣害の心配がある場合は除去しない。

◆かん水について

土壌水分が不足すると樹体の水分ストレスが発生して、老化(過熟)現象が促進され房枯れ・脱粒障害を起こし、小粒・小房となる場合がある。

このため適度なかん水が必要であり、特に毎年穂軸が早くから黄変する園では、早目に対策を行う。

対策は、高温乾燥が続く限り成長維持のためにかん水を続ける。

1. 果粒軟化期以降は、少量多かん水。たっぷりとするのではなく、1回5mm程度を3日置に行う。
2. 降雨があれば、状況に応じ1回分を休んでもよい。
3. かん水の切り上げは収穫の7日前を基準とするが、高温干ばつが続く場合は収穫中にも軽く散水を行うとよい。

※裂果について

- ①一般的な裂果の発生は、糖度12～13%の時に多い。
- ②定期的なかん水ではそう心配はないが、干ばつ以降かん水していない場合は糖度を見極めてかん水する。(8月上旬～盆前の急激なかん水は避ける)

※土壌が乾燥し、ひび割れる前にかん水する。一度に多量のかん水は行わない。

◆ナガノパープル裂果対策について

1. 大房・着果過多による着色遅れと降雨前の強い摘心が裂果要因になる。
果粒付け根まで早く着色が入るように、大房・着果過多にならないよう、袋掛け終了後でも着果制限を行う。最終的な着果制限の判断は7月下旬に(現地事例より)
 - ①一般的に成熟の遅い、主枝の基部付近の新梢に着房している房を中心に、果粒の付け根の色を確認する。
 - ②果粒付け根の色が進んでいない(緑色が抜けていない)場合は、着果制限をする事により成熟が進みやすくなり、裂果の軽減になる。
 - ③着果制限をかける場合は主枝の片側づつで考え、特に成熟(着色)の遅れている房を摘房する。
主枝先端・基部で着房数に多少の偏りが出てもよい。
 - ④果粒軟化期以降、曇天雨が予想される場合は摘心作業を一時中止し、晴れてから再開する。
2. かん水 ※前項参照

◆クイーンルージュ®管理について

1. 縮果症対策：情報No.7を参照に徹底する。
2. 着色管理：副梢の再発生が見られたら、こまめに基部から切除をし、明るさの確保をする。
着色は満開50日頃から始まると考えられ7月下旬に着色が来ているか確認をする。
着房・粒過多は成熟の遅れとなるため、摘房し制限をする。情報No.7を参照に徹底する。
3. 病害対策：病害全般に弱い品種のため薬剤散布は、丁寧に行うと共に、黒とう病や晩腐病の越冬源となる巻きひげの除去を行う。

◆種あり巨峰の明るさ確保について

1. 新梢・果房とも十分光が当たるよう、棚面の暗いところは新梢の整理を行うが、果房上に1枚の葉が乗っている状態で管理する。
2. 二番成りは、晩腐病の発生源となるので巻きひげとともに早めに整理する。
3. 若木・ウイルスフリー樹の新梢整理については、果樹営農技術員までご相談ください。

